

津軽地方の人形ねぶた制作技法の分析
—内部照明の設置と紙貼り作業について—

三 浦 俊 一

本稿の分析対象である人形ねぶたは、ねぶたと呼ばれる燈籠の様式のひとつである。このねぶた燈籠が祭りの主役となるねぶた祭りは、青森県津軽地方で行われている夏季の祭事である。「ねぶた」という言葉は、この祭事で制作される巨大な燈籠を指し示した言葉であるが、現在では祭事自体の名称としても用いられている。津軽地方では、弘前市以外でも、多くの市町村で同様の祭事が行われているが、青森市などでは「ねぶた」と表記され、「ねぶた」と「ねぶた」という二つの名称が地域ごとに使い分けられている。しかし、これは戦後以降のことであり、それ以前の資料を見ると、様々な表記が見られる。

ねぶたと呼ばれる燈籠の様式は、本稿の対象である三次元の立体造形で構成される「人形ねぶた」と、二次元の平面描写を扇型の立体構造に構成した「扇ねぶた」とがある。前者は青森市などで統一された様式として用いられている。また、後者は弘前市などを中心に主流となっている様式である。このねぶたの様式の市町村での違いと、上で述べた「ねぶた」と「ねぶた」という名称の違いが混同され、前者の立体造形的様式を「ねぶた」、後者の平面描写的様式を「ねぶた」と誤認されていることが多いが、弘前市を中心とした地域でも、少数派であるが、人形ねぶたが制作されている。つまり、燈籠の名称の使い分けは市町村ごとの地域間でのものであり、燈籠の形状の違いを示しているものではない。本報告では、「青森ねぶた祭」といった固有名詞を用いる場合はこの使い分けに従い、一般名詞では、「ねぶた」という表記に統一して用いることとした。

本稿は、東北芸術文化学会学会誌第15号掲載の筆者拙稿「津軽地方の人形ねぶた制作技法の分析—題材の設定と構想、骨組みの技法について」の続稿である。それゆえ、ねぶたの歴史的背景や燈籠様式の特徴についての詳細を本稿では記述してしない。この点については上記の筆者拙稿を参照されたい。また、本稿では、上記の筆者拙稿と同様に、筆者自身のこれまでの津軽地方におけるねぶた燈籠制作の実践を基として、人形ねぶたの制作技法である内部照明の設置と紙貼り作業の分析を進める。

内部照明の設置では、使用される器具材料や電源、設置方法とその危険性、また総電力量の一例を示した。紙貼り作業の分析では、使用される道具材料のほか、3パターンの手順を示し分析を加えた。

人形ねぶたの制作は、骨組みの制作作業の後、内部照明の設置、紙貼り作業、墨入れ、蠟引き、色付けと続く。また、同時進行の作業として、土台の木枠制作や、土台部分に貼られる様々な平面的描写の制作作業がある。今後も、別稿にて人形ねぶた制作技法の分析を継続する予定である。